

地域連携センター 田中栄一郎さん（平成16年度入学）



― 飛翔編集員時代の思い出は？

飛翔は、編集員の人に誘われて「面白そうだしやらなきゃ損だな」と思って始めました。こんな機会はないというところで編集長もやりました。印象に残っていることは、一年の後期に「総科とは」というテーマの特集記事を作ったんです。だけど後

からこれは「何かが違うな」と感じて……それは視点が内向きだったんです。飛翔は学生だけじゃなくて高校生も読みます。それで、次の企画会議で「俺たちはこんなことやってるぜ」という企画に絞ることにしました。その時に始めたのが、サークル紹介と、面白い学生を紹介する企画と、自分たちが感じている

ことを知ってもらうためのブックレビューでした。二年生の後期には西条のお店紹介をやったんだけど、完全に外部の人に取材したのは初めてだったんじゃないかと思えます。せっかくパソコンに入っているからということではイラストレーターというソフトの使い方も勉強してレイアウトに生かしたりもしました。変

えるのなら責任はもちろんあるのだけれども、そうやって変えていくことが面白いと思うようになったのはこの飛翔がきっかけです。絶対。

― お仕事について

地域連携センターの役割は大学を地域に売り込むことです。地域と大学に何か問題があつた時に両者の利害関係がうまく一致すれば解決の道筋

がたつはずなんです。そういう別のことをやっている二つのものがうまくマッチングする場を見つけるのが今の一番の仕事かな。例えば、人手不足、労働力不足といった問題を抱えている農村地域と学生のマンパワーを合致させて、授業で田んぼに連れて行って「これ刈ったら一単

位」とかでもいいわけじゃないですか。悪い言い方をしたら。ベンチャー企業とかはまっさらなフィールドから何やってもいいわけじゃないですか。そうじゃなくて今あるものをどう整理するか。そういうことを考えつつやっていますね。

― 今の仕事に就くまでの経緯は？

今のうちに言っておきますが、私の話は参考にしない方がいいですよ（笑）。もともとまちづくりについて勉強したかったので、都市計画系コンサルタントのある都市部の大学院に行けばいいという単純な発想で神戸大学の大学院に進学しました。でも、その先生がどちらかというと理

OB紹介

論系で、まちづくりに実務的に関わっていく先生じゃなかったんですね。それで休学させてもらうことにしました。大学時代はずっと自転車で乗って広島から実家の京都に行ったり、四国をまわったり、京都から北陸とか旅したりしていました。休学してからまた四国一周お遍路したり、九州一周したりして、その時いろんな人の話が聞けて面白かったです。アウトローな生き方をしている人に出会えたりして。そんな時に、酒祭のボランティアを毎年やっていたことで大学時代関わりがあった地域連携センターの塚本先生から「今、人手が足りないから働かないか？」と誘いを受けて、ここに戻ってきて就職しました。

だから普通の人にはあんまり参考にならない（笑）。

―総科で学ばれて良かったことは？

分野の広さは本当に重要。マネジメントになると色んな人の話が分らないと駄目なんです。話が分かるというのは本当に武器だと思います。

―学生にメッセージを

「動けば変わる」という言葉を講演で聴いたのですが、動けば変わるのは他の人もそうです。一番変わるのは自分だと思えます。動いているうちに、「こっちにいけない、こっちにいけない」という風になんて思わなくていい。「動けば何かしら見えてくる」と

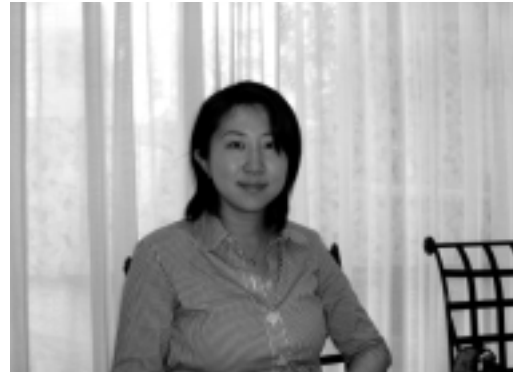
いうことだと思っています。

（取材・筆 20生 山崎 弦太）

（取材 20生 山谷 義貴）
（取材 20生 吉田 聡）



中国新聞社編集局経済部記者 奥田美奈子さん（平成9年度入学）



―お仕事について

私が取材しているエリアは中国地方五県全体です。主な対象はその地域で経済活動をしている人達で、その経済活動の様子や雇用などについて取材をして記事を書いています。少し前までは一年半程銀行の取材を担当していました。最近では【取材日二〇〇八年十一月三〇日】運輸や、行政の経済を担当している経済産業局などの取材を担当し

ています。

―プレッシャーは感じますか？

感じます。記事にするのはいいことだけではなく、厳しいことや事故のことを書かなければならない時もあります。それに記事を見ていろんなことを感じたり思ったりする人がいる訳ですから、どんなに短い記事でもプレッシャーは感じますね。

―一週間はどんな感じですか？

新聞は毎日発行されるので、ものにもよりますがニュースはその日取材したらその日のうちに原稿を書いて次の日には記事になって新聞に出ます。だから夕方から取材をして夕方に原稿を書いて夜の締切まで勝負をすること

もあるし、数日間いろんな人に取材をして回って1、2時間かけて原稿を書いて大きめの記事をつくることもありま

―職場の雰囲気は堅いですか？

全然堅くありません。みんながお互いに意見を言わなくなったらおしまいなので職場はいつも賑やかですよ。

―そんな話し合いの中から記事が生まれたりするのでありますか？

うん。「あの電気屋のパソコンコーナーに人ばかりできて」とか、そういうおしゃべりを職場でもするんですよ。それで「なんでそこに人ばかりができるんだろう」とって疑問に思うじゃないですか。じゃあちよつと取材に行つて

みようかということになって取材に行くことはよくあります。

―日常生活で仕事のために敏感になっていることは？

とにかく新聞は読みますし雑誌も読みますね。でも自分が読みたいものだけ読んでたから視野が狭くなるので自分が普段読んだりしないもの、例えば男性向けのグッズの雑誌や小中学生向けの雑誌、それから高齢の人が好んで読むようなものにも目を通していきます。あとは趣味で散歩に行く時に新しい店とか看板は出てないかということに注意したりしていますね。

―学生時代サークルは？

吹奏楽団でチューバを吹いていました。練習が週三で夏休みはサークルばかりして

OG紹介

たのであんまり勉強はしてなかったですね。活動は広大だけでやることもあったし広島市内の大学の吹奏楽サークルと合同で練習や演奏会をやることもありました。地域の小学校や福祉施設でも演奏会をしました。あと私は涉外という対外的な事務手続きをする役割を担当していました。結構その仕事も楽しかったですね。その時サークルの団員が百人位いたと思うんですが、その百人を切り盛りするといふのもなかなかない体験だったし、それは本当に経験でき良かったと思いますね。

— アルバイトは？

RCCのカメラアシスタントをやりました。仕事は荷物持ちとかライトやマイクの準備などあらゆる雑用です。いろんなところに行けて面白

かったです。例えば県庁に取材に行つて間近で知事を見たリ、災害現場の第一線を目の当たりにしたり、そういうのを自分の目で見られたのは良かったですね。

— 総科で良かったと思うことは？

総科はある程度必修に縛られずにいろんな科目を取れますよね。だから当時は法学部の授業とか工学部、理学部の授業にも行っていました。一つのことについて詳しくかと言われるとそうでもないけれど、取材の中でいろんな人に会う時に、その人の発言のなかにどれだけポイントがあるかというの、ある程度いろんなことに知識がないと気づけないんです。そういう意味ではこういう仕事をする上で強みになっているかもしれないです

ね。

— 総科の後輩にメッセージを

総科はいろんな目的を持つた人が集まっているし用意されている授業も多種多様なので視野を広げられる学部だと思っています。それを生かしていろんなことに首を突っ込んで勉強してみたらいいんじゃないですか。でも世間知らずにならないように、いろんな所に足を運んでみたり、知りたい、行つてみたい、やってみたいという好奇心を満たすようなことにチャレンジしたりしてほしいと思います

(取材記事 20生 山崎 弦太)

(取材 19生 桑田 雅美)

